

援助モダリティ勉強会 第1回議論のポイント

【日時】 2004年2月20日(金) 12:30～14:00(BBL形式)

【場所】 JICA 本部会議室

【参加者】 GRIPS 開発フォーラム、JICA 職員有志(10 数名)

Part I: 発表者より、新モダリティ台頭の背景にある Aid Effectiveness の議論をどう理解するか?、発信すべき日本の ODA の経験は何か?、日本の ODA 改革に対してどのような示唆があるのか?、との問いかけを行った。

主なコメントは以下のとおり。

- ・ Aid Effectiveness の定義は、あまり整理されていないのではないか。従来は、政策・制度の側面が重視されていたが、最近では、Harmonization を主流化する方法として、Aid Effectiveness が担ぎ出されてきた感あり。
- ・ DAC 評価 5 原則(Relevance, Effectiveness, Efficiency, Impact, Sustainability)に照らすと、貧困削減が Impact であれば、調和化・取引費用削減は Efficiency(alternative の比較は難しいが)に相当か。JICA は、これらの原則の中では Effectiveness をより意識してきたように思う。
- ・ 個別案件を超えて Aid Effectiveness を考えてきたかは問うべき。例えば日本の技術協力案件は C/P への技術移転を重視してきたが、受益者の広がりやセクター全体のインパクトについてもより意識する必要があるのではないか。

Part II: 発表者より、モダリティの組合せを考える際の3つの視点として、国レベル(援助依存度、援助マネージメント能力の相違)、セクター・レベル、および 政策サイクル(各フェーズ(計画～実施)における活動の特色の相違)、を説明。

主なコメントは以下のとおり。

- ・ 調査デザイン: 先に結論ありき(=プロジェクトの正当化)とならないよう留意してほしい。理想的な政府システムを描き、その構築を支援するツールとして各種モダリティの役割を論じては如何か? (「財政支援 vs. プロジェクト」、「枠組み vs. 現場/中身」と二項対立的に示すと、欠落してしまう視点がある可能性あり。)
- ・ また、最初から国レベルを考える要素を特定化(援助依存度、援助マネージメント能力)すると、それ以外の要素を無意識に排除する可能性があるので注意すべき。
- ・ 国レベルの視点: 細切れな援助・協力を”scale-up”するためには、政府能力、および 自己財源(税収、民間)の動員が必要。特に に関しては、成長シナリオを描ける可能性が Aid

Effectivenessに影響する。従って、アフリカのような低成長経済(=援助効果を持続させる資金基盤が小さい)における経験の検討は重要。Aid Effectiveness 達成のために必要な要素を洗い出し、対象国が各要素のスペクトラムの中でどこに位置づけられるかをドナーと援助受入れ側で共有する必要あり。

- ・ 援助依存度については、援助の対 GDP 比などのマクロ指標に加え、特定セクターの経常・資本予算における援助依存度、調達数なども重要な要素(例えば、ガーナの水セクターは資本支出の大半を援助に依存しているので、援助手続き・調達そのものが行政機関のルールとなっているのが実状)。
- ・ 援助マネジメント能力の定義は難しい。「やる気」(主体性に裏づけられた意思)の有無も重要。IDA が最近発表した「アフリカ支援のための戦略的枠組み」は、CPIA ランキングが高い(=援助吸収・活用能力が高い)国はPRSCといった一般財政支援、弱い国はTAを中心とした支援を提言しており、参考にされたい。
- ・ セクター・レベルの視点: セクターの活動の特徴づけはより複雑。例えば、教育といった同一セクターの中でも、初等教育(官が中心)と高等教育(民間の役割がより大)とでは異なる。
- ・ 能力開発との関係: 現在 JICA にて、能力開発の対象を中央政府・地方・最終裨益者といった各グループに分けてマッピングする調査を実施中なので、本調査の参考になりうる(企画にて ECDPM に委託調査を実施中)。
- ・ 本調査における「ベスト・ミックス」という表現の使い方: 対外認知度は必ずしも高くない用語。また、最近では使われない傾向があるのではないかと、この表現を本調査で使うことについて、今回の勉強会では賛否両論があった(「堂々と使うべき」vs.「色がついた表現」)。

(以上)